

農機具の変遷 —「千歯こき」を中心に—

倉吉博物館 主任学芸員 関本 明子

新田開発と農業技術の発展

戦乱の世が終わり江戸時代に入ると、急速に人口が増加する。17世紀初頭1200万人余りだった人口は約100年の間に約2.5倍の3000万人以上となった。江戸幕府や大名は人口増加に対応するため、耕作地を増やす新田開発を積極的に行った。

耕地面積の拡大とともに、農業技術の進歩により生産力も上昇する。備中鍬と呼ばれる刃が分かれた鍬は、それまでの平鍬より深く土を耕すことが可能になった。このような作業効率のよい農具の登場に加え、干鰯など肥料や品種の改良、農業技術を記す農書の普及などが後押しとなり、米の生産量は飛躍的に増大する。

新しい農具—千歯こき—

米の収穫後の作業においても新たな農具が普及した。中国から伝わった唐箕は、内部の羽根車を手動で回して風を起し、実の詰まった米と塵やごみを選別する。また、稲穂から籾を分離する脱穀には「千歯こき」が用いられた。

千歯こきは、江戸時代中期に泉州堺（大阪府）で考案されたと伝わる。台木に竹や鉄製の歯（穂）が17～23本程度取り付けられ、刈り取った稲穂を櫛状の歯に通して籾を落とす。千歯以前の脱穀作業は、竹管

を紐でつないだこき箸・こき管で籾をしごき取る方法であったが、千歯こきの登場によって作業効率は2～3倍に向上し、全国各地に広く普及した。

生産地は若狭の早瀬（福井県）のほか諏訪（長野県）、倉吉（鳥取県）が知られる。なかでも最盛期の正徳初めには年間約9万5千挺を出荷し、日本最大級の生産地であった倉吉の千歯こきについて紹介する。

倉吉の千歯こき

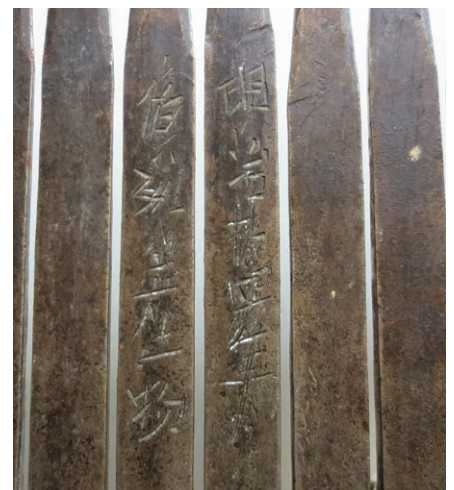
鳥取県は中国山地で産出される良質な砂鉄を原料とするたたら製鉄が盛んであった。国宝「童子切」を作刀した平安時代の刀工・大原安綱は伯耆国（鳥取県中西部）の人であり、この地において鍛冶は古くから重要な産業の一つであった。

倉吉で千歯製造が始まった時期を示す資料はなく伝承だけであったが、近年の調査の中で、1889（明治22）年『官報』掲載の「倉吉稲扱製造景況」という記事の存在が明らかになった（横浜市歴史博物館図録『千歯扱き』・2013年）。この記事では、倉吉での創業は安永年間（1772～81）に堺の稲こきを模倣したことに始まり、その後、1838（天保9）年に焼入れに改良を加えたことで全国無比の評判を得るようになった、と伝える。

ここでいう改良とは、歯の焼入れの際に、鮎のウルク（内臓などの塩漬け、または塩辛のようなもの）に糠、膠、塩、硝石を調合した薬を塗って仕上げる倉吉独自の製作技術で、「伽羅鋼」と呼ぶ。この特殊な焼入れにより安価な軟鉄に弾性を持たせ、優れた製品を大量に仕上げるのが可能となった。倉吉産の千歯の台



「無類飛切伽羅鋼請合」の墨書が残されている台木（倉吉博物館所蔵）



歯に刻まれた製造年（右の行「明治拾四年」）と製造地（「白州産物」）（倉吉博物館所蔵）

木には独特な筆文字で「無類飛切伽羅鋼請合」と記されており、これは「他に類をみない飛び切りの伽羅鋼」を意味する、一種ブランドロゴのようなものであった。

千歯こきの普及—修理と行商—

倉吉の千歯こきが全国に普及した要因として、鍛冶職人が全国各地に出向き、製品の販売だけでなく古い千歯の下取りや、折れたり曲がったりした歯の修繕を行ったことが挙げられる。

元千歯鍛冶の家に古い行商日記が保管されていた。小さな帳面には1880（明治13）年に長崎県の五島列島、翌年は青森県、翌々年は岩手県へ、いずれも半年にわたる長い旅の行程が記されている。岩手県には千歯鍛冶4人が共に出向いていた。一行の旅は拠点を設け、そこから各人が別々の場所へ出掛けて販売・修理を行い、しばらくするとまた別の拠点へと移動する。修理に必要な道具類、なにかと荷がかさばる行商の旅も皆で協力して行っていたことが分かる。また、行商

先の土地に定住し、当地で千歯こきを製造販売する職人も現れた。こうして「倉吉の千歯こき」は全国各地に広がっていった。

回転式足踏脱穀機の登場—千歯こきの衰退—

明治末年、自転車のスポークに稲穂が絡まり、ばらばらと飛び散る光景にヒントを得た回転式足踏脱穀機が発明される。新しい農具の登場により千歯こきの需要は急速に下がり、大正～昭和初期には製造を終了するが、千歯のほうが種籾を採種するのに適していたことから重宝され、その後も長く使用されていたようである。

千歯こきは農具には珍しく、製造元を示す墨書や焼印が台木に、歯には年号や製作者名が刻まれているものが多い。今後、訪れた博物館で展示されている千歯こきをご覧になった際は、その点もぜひ注目していただきたい。来歴を知る手掛かりがきつと見付かることだろう。



倉吉の千歯こき（大正7年製作）〈倉吉博物館所蔵〉 千歯こきは台木の状態(p.28写真左)で販売され、使用する際、脚は購入者が調達した。そのため、脚に地域性が出てくる。倉吉の千歯こきは、前に板が付いているのが特徴だ。脱穀した籾が板に当たり、後に飛び散らず、前にまとめて落ちるしくみになっている。